図書館のご近所さん

大宮まゆっこ新聞

Vol.023
2025年6月1日発行
OMIYA LIBRARY

今回のご近所さんは、さいたま市を拠点として活動するブラインドサッカーチーム「埼玉T．Wings」。桜区にあるレッズランドにて練習中の、チームのみなさんにお話を伺ってきました。

加藤（かとう）　健人（けんと）さん

約15年間、日本代表選手としてアジア選手権や世界選手権など様々な国際試合に出場。
キャプテンとしてチームに所属しながら、ブラインドサッカーの体験会や講演など、さまざまなイベントやメディアに出演。2024年のパリ・パラリンピック競技大会では日本代表戦のスタジオ解説を務める。

ーブラインドサッカーを始めたきっかけを教えてください

サッカーは小学3年生から高校まで行っていましたが、高校3年生の頃に遺伝性の病気で視覚に障がいを持ち、競技ができなくなってしまいました。両親がこの競技を見つけ、20歳からブラインドサッカーを始め、自分にはこれしかないと思える出会いでした。

ーブラインドサッカーをやっていてよかったと思うことは何ですか？

競技を通じて何事にも挑戦する大切さを知り、夢を持つきっかけになりました。障がいを持った時はこれから先、何もできないのではないかと悩み、人生が終わってしまったと思っていましたが、ブラインドサッカーを通じて様々な経験をすることができました。多くの人と出会うこともでき、感謝しています。

ー代表としての活動について教えてください

2007年から2021年まで日本代表として活動をしていました。国内での試合だけでなく、アジア選手権や親善試合など、様々な国に行って大会に出場しました。

ブラインドサッカーはスペイン発祥のスポーツですが、多くの国々で競技が行われています。日本では2002年にブラインドサッカー協会が発足し、私が競技を始めた年と近く、競技に対する認知度、環境や人の流れが変わっていく様子を感じながら、20年間競技に携わってきました。

私が日本代表だった当時は世界ランク10位だったのが、現在は3位まで上がり、チームのレベルが年々上がっているのを感じています。

ーブラインドサッカーを初めて知った方に伝えたいことはありますか

このスポーツの良さは、障がいの有無に関係なく誰もが一緒に競技ができることです。少しでも興味を持たれた方がいましたら、ぜひ気軽に試合の観戦や体験をしていただけたら嬉しいです。

ボールを取りに行く時は「ボイ！」という声を出して相手に自分の位置を知らせます
※「ボイ（Voy）」はスペイン語で「行く」

ブラインドサッカーについて

フットサルをもとに考案された5人制でプレイするスポーツ。ゴールキーパー以外の選手はアイマスクを着用し、目が見えない状態で競技を行う。ボールから鳴る音とガイドや味方の声をたよりにゴールをめざす。

視覚に障がいがある人も健常の人も一緒に競技をする事ができ、年齢問わず、プレイヤーとしてだけでなくサポーターとしても参加をすることができる。

2月には、さいたま市内で国際大会の「さいたま市ノーマライゼーションカップ」が開催された。

フィールドプレイヤーはアイマスクを着用します

埼玉T．Wingsについて

2003年に創立。さいたま市を拠点として活動する。年齢性別を問わず、幅広いメンバーで構成され、視覚障がいがある人だけでなく健常の人もプレイヤーやサポーターとして多く参加。一人ひとりがチームの重要な役割を担っている。

【チームのビジョン】

視覚障がいやブラインドサッカーを通して、一人ひとりの多様な生き方を尊重し、共生社会を実現する。

★プレイヤー、サポーター募集中！
http://twings.jp/
twings.mail@gmail.com

和気あいあいとした雰囲気で、互いにしっかりと声を掛け合いながら準備や練習をします

ーチームと出会ってからプレイヤーになるまでの経緯を教えてください

SNSを通じてチームのことを知りました。見学をしたいと連絡をしたところ、すぐに返事があり、その2日後には練習を観に行っていました。

現在の監督である、菊島さんの気さくなお人柄のおかげでその日は見学だけでなく、練習にも参加をしました。監督から「これからも一緒にブラインドサッカーをやろう」と誘っていただき、チームの一員となりました。

ー山中さんが思う競技やチームの魅力を教えてください

中学生の頃にサッカーをやっていましたが、目隠しをしてボールを蹴るブラインドサッカーは当時やっていたサッカーと全く違うもので、初めて練習に参加したときは全く体が動きませんでした。20代になってから何もできなかったという感覚を味わえたことがとても新鮮で、練習を積み重ねてうまくなりたいと思いました。

ブラインドサッカーはプレイヤーとして参加をするだけでなく、外から声をかけるガイドという役割もあります。60代になってもスポーツに関われる姿をみて、いくつになっても競技に参加できるのがこのスポーツの良さだと思いました。チームは家族のように仲が良く、和気あいあいと活動をしています。

私は今年で所属5年目になるので、組織づくりをより強化し、応援してくれる方を増やしていきたいと思っています。ブラインドサッカーに興味を持った方には、まずは気軽に体験してほしいですね。

山中（やまなか）　優汰（ゆうた）さん

スポーツを通じて障がい福祉という分野を学びたいと思ったことをきっかけにブラインドサッカーを始める。
介護の勉強をするために福祉の専門学校へ通いながら自主的に学ぶ場所を探していたとき、チーム「埼玉T．Wings」と出会う。現在は仕事をする傍ら、プレイヤーとして5年間チームに所属。

check!

【ガイドとは？】
フィールドプレイヤーとは別に、目の見える人が協力します。相手チームのゴール裏に立ち、プレイヤーへ戦術的な指示を出したり、ゴールの位置や距離、角度を伝えたりします。選手は「音」に集中しているため、試合中はお静かに！シュートが決まったら大きな声援と拍手を送りましょう！

山中さんおすすめ本

『銀河のワールドカップ』
川端裕人／著
集英社　2006年

【山中さんコメント】
「銀河へキックオフ!!」というタイトルで、アニメにもなった小説です。ブラインドサッカーの描写もあり、この小説がきっかけでブラインドサッカーという競技があることやルールを知りました。
普段の読書では小説を読むのが好きで、登場人物と自分自身を置き換えて読むのが好きです。

加藤さんおすすめ本

①『目隠し遊びで始めるインクルーシブ教育』
菊原伸郎（埼玉大学サッカー部）／著　協力／加藤健人
大修館書店　2022年

②『ブラインドから君の歌が聴こえる』
サミュエル・サトシ／編著
河出書房新社　2020年

【加藤さんコメント】
どちらの本も著者の方と面識があり、取材をもとに執筆された本です。ブラインドサッカーを題材とした本が少ないなか、ノンフィクションではない小説があるのも嬉しいですね。
読書はスマートフォンのアプリケーションのオーディオブックを使っています。普段はビジネス書を読むことが多く、スマートフォンで聞けることで、より気軽に読書ができるようになりました。

大宮図書館
ホームページ

大宮図書館
X

Xではイベントやスタッフディコーナーの紹介など大宮図書館の情報を日々お伝えしています。ぜひ、フォローしてみてください！

この冊子内の表紙画像はBOOKデータベースより引用しています。

おおみや読書バトン

18回 翻訳

紹介者　ももかも

海外の小説などを読むときに必要な翻訳。「翻訳」とは、広辞苑第七版で「ある言語で表現された文章の内容を他の言語になおすこと」と書かれています。

図書館が所蔵する翻訳された本の内で、一番数が多いのは英語の小説を日本語に翻訳したものです。

今回は逆のケースの、日本語の小説を英語に訳したものはどう表現されるのか、久しぶりに芥川龍之介著『羅生門』を日本語と英語で読んでみました。ひとつは、グレン・W・ショウの訳（１９６４年出版）、もうひとつは小島嶽（こじまたかし）の訳（２０１８年出版）です。５０年以上離れている二つの訳文に注目しながら読んでみました。

芥川龍之介
「或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」
グレン・W・ショウ
「It was evening. A solitary lackey sat under Rashomon waiting for the rain to clear.」
小島嶽
「It was a chilly evening. A servant of a samurai stood under the Rashomon, waiting for a break rain.」

まず、小島訳の最初の文にある「chilly」ですが、研究社リーダーズ英和中辞典第２版によると「冷えびえする。うすら寒い、冷たい（日・天候など）」と訳されています。そして次の文の「一人の下人」を、グレンは「solitary（単独の）lackey（小間使）」、小島は「servant（家来）of a samurai」とそれぞれ訳しています。訳した時代が５０年以上違いますので、表現の背景が違う可能性がありますが、ニュアンスが違いますよね。

このように、一般的に日本語の単語は色々な意味を持っていて、関する語彙も多いので、英語では訳者によって異なる単語を使用する場合があります。翻訳の定義にある、「ある言語で表現された文章の内容を他の言語になおすこと」を見ても、文章の内容がキーになっているような感じです。

ここまで何やら難しくなりましたが、翻訳とは、国語の長文読解テストのすべての設問に対して、「作者が何を言おうとしているのか」の回答を出しているような気がします。（しかも全問正解で！）
また、翻訳先の言語としても上下の文のつなぎなどを考えた文章にしなければ読みにくい文章になるので、やっぱりかなり難しいなあと考えてしまいます。

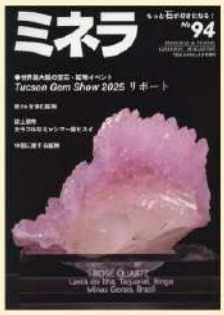
なかなか頭の体操になるので、短い読み物を使って、皆さまもちょっと翻訳にチャレンジしてみませんか？

次回→落ち葉

紹介した本　『羅生門』
芥川 龍之介／著　　グレン・W・ショウ／訳
原書房　1964年

『RASHŌMON AND OTHER STORIES』
芥川 龍之介／著　　小島嶽／訳
チャールズ・イー・タトル出版 2018年

オススメ雑誌



『ミネラ』
エスプレス・メディア出版
年6回（隔月刊）

今回ご紹介する雑誌『ミネラ』は、鉱物図鑑にはない情報や最新情報をキレイな写真と共に楽しむことができる鉱物、化石の専門雑誌です。

毎号一つの鉱物にフォーカスした特集が組まれており、その種類は多種多様。宝石や化石、果ては隕石まであります。特集以外にも、採掘秘話や読者が持っている石を鑑定するコーナー等があり、鉱物に興味がない方でも楽しく読める内容となっています。

また、見た目の美しさも魅力のひとつです。成分や産地によって、サイズ、色、形が様々に変化する鉱物は、まさに地球が生み出した自然のアート。特に私の目を引いた鉱石は「クラスター」と呼ばれる水晶の結晶が群生したもので、一つとして同じ形のものはありません。そのミステリアスな形状は、怪しさもさることながらそれを超越するほどの美しさを感じてしまいます。『ミネラ』では、たくさんのクラスターの写真を見ることができます。

そんな鉱物の美しさに目覚めてしまったあなた。なんだかコレクションしたくなってきませんか？　なかなか実物に触れる機会がないという方もご安心ください。この雑誌には誌上通販というものがございます。お値段もお手頃なものが多いので、興味がわいたという方は、購入を検討してみてはいかがでしょうか。

鉱物・化石専門雑誌『ミネラ』。ぜひ皆様もご覧ください。

わたしのすきなえほん

『あーっとかたづけ』
田中達也／作
福音館書店　2023年

私のおすすめの絵本は、ミニチュア写真家・見立て作家の田中達也による写真絵本『あーっとかたづけ』。兎にも角にも私の予想をはるかに覆してくれた絵本である。まず表紙とタイトルを見て、「はいはい、緑色の作業着を着た小人たちがあーっという間に片付けてくれるお話ね」と思ったのが大間違い。ページをめくると、脱ぎっぱなしの洋服がキャンプ場に、水が出しっぱなしの洗面台がプールに、トイレがスキー場に変わるのだからもうニンマリと笑うしかないのだ。

「見立て」とは、誰しも子どもの頃に経験したことのある、空に浮かぶ雲や拾った石ころを、勝手に「〇〇みたい！」となぞった遊びだが、この絵本は、本来ならばイライラする散らかし放題の現状が「見立て」によって新しく楽しい世界へと大変身する。身近なものが別のものに見えてくる驚きと面白さに溢れていて、こんな片付けがあったのかとワクワクさせてくれる。そして、すみずみまで見ていくと、その世界に住むひとりひとりにエピソードやストーリーが生まれ、子どもも大人も楽しめる。

そして最後に「結局ぜんぜん片付いていないじゃん」と呟いてしまったら、それはもう見立て作家の思うつぼ。してやったりに違いない。

toshostagram

トショスタグラム

#「からだコネクト」キータ　#パーソナルトレーニングサロン ki-ta
#図書館テラスから見えるよ
#首元がおしゃれで可愛い

貴重品は持ち歩こう

大西民子の一首

回しつつ歩む日傘のレースより
こぼれてやまず木々のみどりは

『印度の果実』より

日傘を回しながら軽やかに歩いていた民子は、レースの透き間から垣間見える緑に目を奪われます。こぼれてやまない緑に木々の生命力を感じたのでしょうか。

ゆかりの文学コーナー

【宮澤章二とジングルベル】

私の通っていた幼稚園は、クリスマスになるとサンタさんがやって来て、子どもたちにお菓子をプレゼントしてくれました。そして、子どもたちは「ジングルベル」などクリスマスソングをお礼に歌うのが毎年の恒例イベントでした。明るく軽やかな「ジングルベル」の歌を聞くと、私はいまでも幼稚園の頃の想い出、ストーブを焚いた教室の匂いや優しかった園長先生の顔、そして両親や幼い妹たちと過ごした幸せなクリスマスの光景を思い出します。

今や、すっかりクリスマスソングとして定番となった「ジングルベル」ですが、歌詞を日本語に翻訳したのが実は大宮に住んでいた詩人と知って驚いた方も多いのではないでしょうか。その詩人の名前は宮澤章二（みやざわしょうじ）。宮澤は、１９１９（大正８）年、埼玉県三田ヶ谷村（現・埼玉県羽生市）に生まれました。３８歳のとき、大宮市吉野町（現・さいたま市北区）に移り住み、以後２００５（平成１７）年に８５歳で亡くなるまで大宮を拠点に活躍しています。

先程の「ジングルベル」の歌は、昭和２０年代に小学校の教科書に掲載されるようになりますが、この頃は出版社によって訳者がまちまちだったそうです。昭和４６年以降は、宮澤訳の歌詞に統一されるようになったということで、改めて歌詞を見てみると、どうやら幼稚園で私の歌っていた「ジングルベル」もこの宮澤訳のものだったようです。

「なにもない」と揶揄（やゆ）されがちな埼玉。けれどしっかりと見つめていれば、宮澤のような詩人をはじめとする、たくさんの魅力的な人々がいることに気づかされます。

参考文献
・『宮澤章二 ―風と光の詩人 企画展―』さいたま文学館／編集　２０１５年
・『行為の意味 ―青春前期の君たちへ贈る心の詩― 新装版』宮澤章二／著　こま書房新社　２０１８年